KISS®

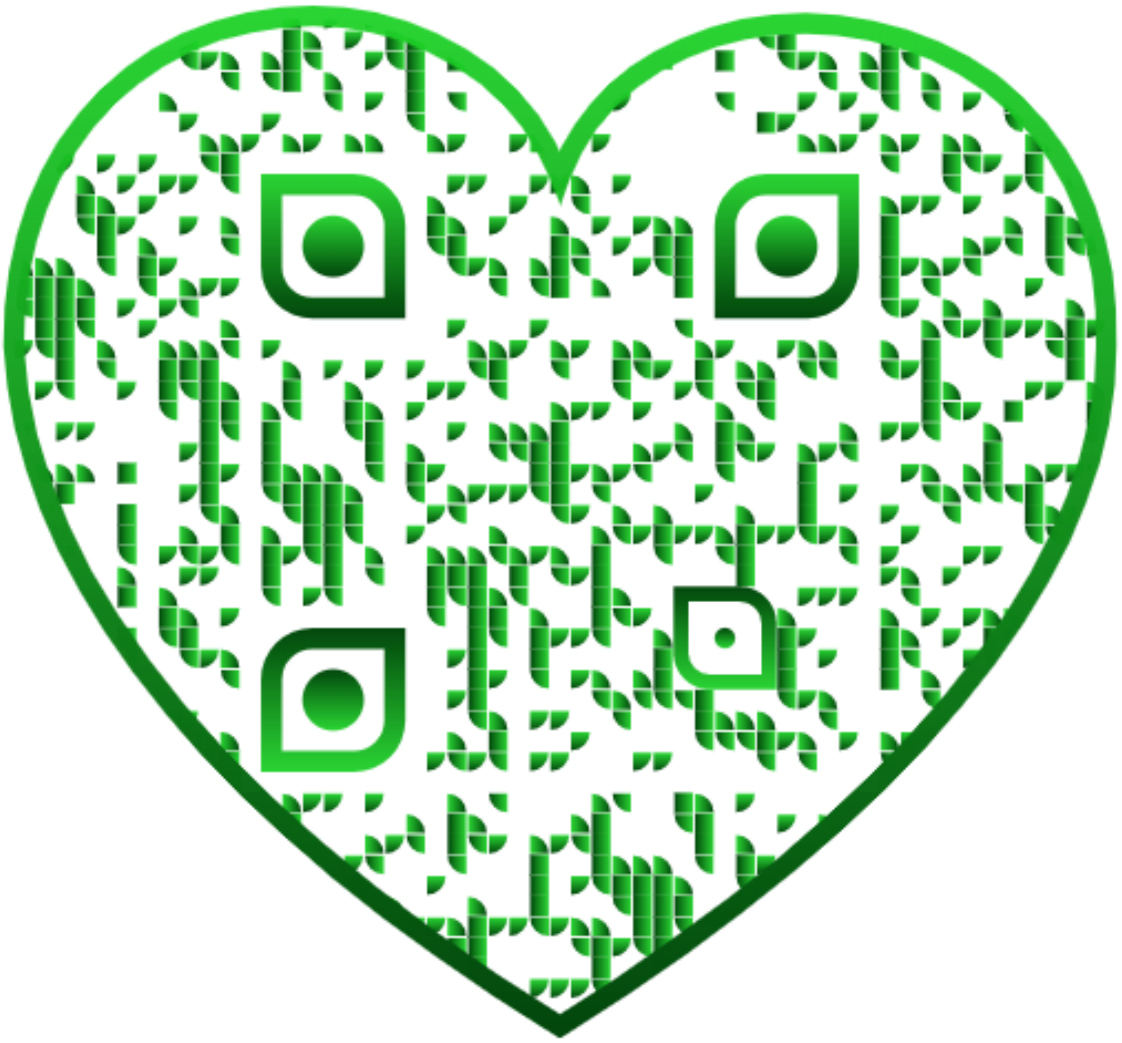
JAPAN TOUR 1988

KISS®

力

UDO

AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1988



AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1988

KISS®

キッス

日本公演

4月16日 名古屋 名古屋市公会堂
主催●中部日本放送

4月18日 大阪 大阪城ホール
主催●読売テレビ放送/ウドー音楽事務所

4月20日 横浜 横浜文化体育館
主催●ウドー横浜/TVKテレビ

4月21日 東京 武道館大ホール
4月22日 東京 武道館大ホール
4月24日 東京 代々木オリンピックプール
主催●文化放送/ウドー音楽事務所

招聘●ウドー音楽事務所
協力●ポリスター・レコード

PHOTOS by NEIL ZLOZOWER
ROSS HALFIN
MARK WEISS
DESIGN by INDEX
PRINTING by L.D.KIKAKU

トップ・バンドとしての誇りを保ち続け、君臨するキッス

伊藤政則
MASA ITO

エアロスミスの劇的な復活によって、70年代の古典的ロック・バンドに対する再認識の動きが強まってきている。79年代後期に活躍したAC/DCにまで強烈なスポットライトが当てられている現状を見てみると、現在、最前線で活動している若手ハード・ロック・バンドの基本となる、いわゆる原の回帰願望の流れをそこに読み取ることができる。

どのバンドも影響を受けたアーティストの模倣を入門編とし、その骨組みの上に独自の個性を形成していく。それが個性となり、バンドの色合いとなっていくのだが、心の片隅には常に対する憧れとコンプレックスが消えることのない動因として、しっかり残されているものだ。ジョン・ボン・ジョヴィが記すべき"モンスターズ・オブ・ロック"の大舞台にキッスのポール・スタンレーを招待したり、あるいはエアロスミスのショウに飛び入りした事実は、その精神の強さを象徴するエピソードとなった。

10年振り3度目の来日公演を決めたキッスは、70年代のアメリカン・ロックン・ロールの記録を次々に塗り変えながら、ハード・ロック・バンドがアイドルとして成立する新イデオロギーを確立させた。英米の熱狂ぶりに優るとも劣らない歓迎の嵐を浴びた日本のマーケットも、キッスに酔い、キッスに踊り、キッスに対し最大級の敬意をあらわしたのである。あらゆる雑誌がキッスを追いかけ、NHKはキッスのライヴを特集して全国のプラウン管にショッキングな映像を送り込んだのである。メイクとあの過激な衣装でジャンボ機から降りてくる姿は、遠い惑星からの使者のように映ったし、秘密の人しか素顔を知らないという噂が電脳ゲームの如くファンの間を飛びかい、空港から都内までキッスを追いかけるテレビ局が出現するに至って、日本中がパニックの大きな渦に飲み込まれたような錯覚に陥った。

キッスは確かに異星人だった。彼らが求めたロック・コンサートは、夢とロマンが凝縮した移動サーカス的パフォーマンスで、従来のロック・コンサートの概念を根底から覆す画期的な発想で構成されていたのである。立体的ステージ、シアトリカル・ギミック、そしてサイコ・ドラマ的演出――。キッスは観衆の求めるすべての夢をステージ上で華麗に体現してみせたのである。

夢物語の語り部としての役割で考え出された仮面(メイク)は、あらゆる側面からキッスというバンドをサポートし、当初の目的をすべて遂行させてしまう。素顔に戻ったキッスは新たな歴史を創造すべく、バンドの第2章に続く道を歩み始めたのである。

ハード・ロックにポップな感性を持ち込み、わかりやすいロックを供給し続けたキッスの実績はギラリと光っている。しかも、10数年間に渡りトップの座を死守しながら、その強烈のエネルギーと影響力を保ち続けたことは、多くのミュージシャンが尊敬のまなざしを送っているポイントでもある。ジーン・シモンズは昨年5月ロンドンでこう語っている。

「一発のヒット・アルバムを出すよりも、長い間トップ・バンドでいることの方が難しい。しかし、キッスはそれを実現している」と。

続々と誕生する若手バンドのミリオン・セラー・アルバムを長売ったような台頭だが、確かにその通りなのである。時代の誘惑にも負けずに、信じる音楽を頑固に貫き通し、そのうえでトップ・バンドであり続けることは本当に難しい。その点、キッスは過去もそして現在もトップ・バンドとしての誇りを保ち続けている。10数年前の名曲「ラヴ・ガン」をオープニング・ナンバーに持ってきた全米ツアーでも、彼らは自信に満ちた顔でキッスの長い歴史の断片を披露し、さらには、新しい歴史を告げる新作「Crazy Nights」からのナンバーを堂々と演奏したという。

キッスの出現以来、彼らの装飾の部分だけを過大模写したバンドが増えている。化粧をし、派手な仕掛けと目もくらむばかりのライティング――。ところが、ジーン・シモンズが言うように"内容が伴なっていない"バンドが多過ぎる。高度な音楽性を持ち、その音楽をより楽しんでもらうために考えだした装飾が、全く次元の違う形で使われ始めたのである――。

これから始まるキッスのショウをじっくりと見てもらいたい。ある人は10年前の想い出と現在をシンクロさせるだろうし、また新世代のファンはそのパフォーマンスの圧倒的な破壊力に腰を抜かすだろう。しかし、ショウを見終った後で、誰もがエンターテイメントの基本とその意義を正確に理解してくれるに違いない。ロック・コンサートをショウからエンターテイメントに見事に変貌させたキッスの姿は、近代ハード・ロックのあらゆる要素の凝縮だからである。

すべてはキッスから始まった。10年振りにそれを再確認する。読者諸いがする――。

力
力

PAUL STANLEY
ポール・スタンレー(Vocals, Guitar)

1952年1月20日生まれ／ニューヨークのクイーンズ出身。60年代後半からバンド活動をしていた彼は、ジーン・シモンズとの出会いをきっかけにふたりで新バンドの結成を決意。ローリング・ストーン誌でみつけたピーター・クリスの"バンド／メンバー募集"の広告を通じて彼らはお互いに接近し、3人でキッスを結成する。それからまもなくN.Yの情報紙"ヴィレッジ・ヴォイス"に出したギタリスト募集の広告によって、エース・フレーリーを獲得し、この4人でキッスが正式にスタートしたのは'72年のことである。

N.Yのハイスクール・オブ・ミュージック・アンド・アート時代には、すでに近所の友人たちとバンドを組んで演奏活動をしていたという。そのN.Yのクラブ・シーンで演奏活動をしていた頃は、もっぱらギタリストとして活躍していたらしい。キッスでの活動においてはフロントマンとして、またヴォーカリストとしてのイメージが強いポールだが、ギタリストとしてはもちろん、ソングライターとしてもバンドに貢献していて、最近では「地獄の神話」('92年)や「アニマライズ」('94年)、「アサイラム」('85年)のプロデュースも手がけるなど、まさに八面六臂の大活躍である。(革合 雅)

GENE SIMMONS

ジーン・シモンズ(Bass, Vocals)

1949年8月25日生まれ／イスラエル出身。イスラエルで生まれた彼は、まもなくニューヨークのブルックリン、そしてクイーンズに移住。大学卒業後は、小学校の教師をしていたこともあるという。また、"ヴォーグ"誌の編集者として音楽コラムを担当していたこともあるというユニークな経歴を持つジーンだが、彼もまた60年代後半から本格的な音楽活動をスタート。70年には友人の紹介でポール・スタンレーと知り合い、ふたりでヴィキッド・レスター（当初はレインボーと名のっていたらしい）なるバンドを組んで、演奏活動をしていたこともあるという。ちなみにそのヴィキッド・レスターのメンバーのなかにはブルース・キューリックの実兄ボブ・キューリックや現トゥイステッド・シスターのJ.J.フレンチもいたらしい。

キッスきってのエンターテイナーである彼は、俳優としても有名で、出演作には「未来警察」('84年)や「ハロウィン3III・地獄のロック&ローラー」('86年)がある。また、プロデューサーとしても大活躍中で、バンドの「アサイラム」('85年)などをポールとともに手がけているほか、キールやブラック・アンド・ブルーなどの作品をプロデュースしている。

(富吉 隆)

ERIC CARR
エリック・カー(Drums)

1963年7月12日生まれ／ニューヨークのブルックリン出身。'80年発表の"仮面の正体"を最後にバンドを脱退したピーター・クリスの後任として、同年7月にキッスに加入。翌81年発表のキッスとしては初のトータル・コンセプト・アルバム"魔界大決戦"がエリック加入後のバンドの第1弾となった。

幼い頃はビートルズが大好きだったという彼は、リンゴ・スターに憧れてドラマーを目指すようになったという。やがて親戚からドラム・セットをプレゼントされたのがきっかけで、10代前半の頃から本格的にドラムをプレイしはじめて、ロック・ミュージシャンを志すようになったという。キッスでの活動以前は、もっぱらバブ・バンドのメンバーとして、クラブやバーで演奏活動をしていたらしい。当時はトップ40ヒットのコピーが中心で、そうしたバブ・バンドでの活動が約5年ぐらい続いたという。'80年5月になってピーター・クリスの脱退が発表されると、エリックはバンドに接近し、オーディションを経てキッスの正式なメンバーとなった。いまではポールやジーンに続くキッスの第三の男としてすっかりおなじみの存在で、ソングライターとしてもバンドに貢献している。

（落合 隆）

BRUCE KULICK
ブルース・キューリック(Guitar)

1953年12月12日生まれ／ニューヨークのブルックリン出身。'84年秋のヨーロッパ・ツアー中に病気(Reiters Syndrome)で倒れたマーク・セント・ジョンの代役としてキッスに参加。しかし、マークの容態がいっこうに回復しないことから、同年12月に正式にキッスのメンバーとなった。エース・フレーリー、ヴィニー・ヴィンセント、そしてマーク・セント・ジョンに続くキッスの四代目ギタリストである。

ブルースは、かつてバランスやミートローフのバンドで活躍していたギタリスト、ボブ・キューリックの実弟。兄ボブの影響もあって、10代前半の頃からギターを弾いていたという。やがてジョージ・マックレーやミートローフのツアーに同行するなど、本格的な音楽活動をスタート。70年代後半にはマイケル・ボルトンらとともにブラックジャックなるバンドを結成するが、わずか「BlackJack」('79年)と「Worlds Apart」('80年)のアルバム2枚の発表に終わった。そのブラックジャックでの活動を経てN.Y.の伝説的なバンド、グッド・ラッツに加わり、彼らの「Great American Music」('81年)にも参加しているが、その後はN.Y.周辺で独自の活動をしていた。　(瀬合 隆)

EVERLAST
53
pro

B.C.Rich

23

力
力
力

力

力

力
力

常に最高のロック・ショウを展開するキッス

増田勇一(BURRN!)
YUICHI MASUDA

何て言ったらいいんだろう。僕はいまだにKISSの来日を、どういう顔をして待っていたらいいのか、わからずにいるのだ。"実感がわかない"というヤツなのかもしれないし、心のどこかに"何たかだか言ったって、どうせ来やしないんだから"といったアキラメの気持があったからなのかもしれないし、とにかく"どうしたらいいのかわからない"のだ。

'88年2月、どうしてもKISSが観たくて僕はアメリカに飛んだ。幸運にもラスヴェガス、サンバーナディーノ、サンディエゴの3ヵ所で"ASYLUM TOUR"のステージを観ることが出来た。この時のコンサートは、過去2回の来日公演とは違った意味——つまり、現在のKISSの実像をとらえることが出来た、という意味で感動的だったし、ステージの後方でまばゆく輝く巨大な電飾ロゴや、花火などの仕掛けの凄さもさることながら、その内容の充実ぶりには、もう圧倒されるしかなかった。ポール・スタンレーやジーン・シモンズの力量の大きさは言うまでもないが、日本のファンにとっては"未だ見ぬ大物"ともいうべきエリック・カーとブルース・キューリックの技量も、それに優るとも劣らないものなのだ。しかも、技術的には本当に凄いことをやっていながら、ステージとの4人は、"ロック・エンターテインメントに徹しているようにしか見えない"のだ。技術とエンターテインメントの、どちらが1つか欠けてもKISSのスタイルは成り立たないわけだが、どうあれ、他のバンドには絶対に真似の出来ないことだろう。

うだからこそ、こんなに冷静な文章を書いていられるが、ショウの最中は文字どおり我を忘れていた。"Rock And Roll All Nite"の大合唱が起こった時には、思わず武道館での記憶がフラッシュバックしてしまったし、"We Want KISS!"のコールの渦に巻き込まれた時、これ以上のロック・ショウはあり得ないと感じた。

そして、その時に初めてジーン・シモンズにインタビューした。テレコを持つ手が震えた。そんな僕に向かって彼は言ったのだ。

「実には日本に行けると思う。武道館でまた会おう。」

しかし、恒存知のとおり、その約束は果たされなかった。ジーンだけならまだしも(行)そのコメントを活字にした僕までもが"大ウソツキ"になってしまったのだ。

'89年の来日が実現しそうにないとわかった時、正直なところ、僕の気持の80%は"アキラメ"の色に染まっていた。だってジーンは、「これまでのどの機会よりも、実現の可能性が強い」とまで言っていたのだから……。

その、残りの20%に賭けるような心境で、昨年1月、僕は再び渡米した。フィラデルフィアとニュージャージーで"CRAZY TOUR"のショウを観るために。そして"20%"を少しでも大きくむくらませるために……。

前年までのパターンと違い、「Detroit Rock City」ではなく「Love Gun」で幕を開けたそのステージは、"これ以上のものはあり得ない"と思わせた"ASYLUM TOUR"のスケールをも確実に上回っていた。当然、ロック・バンドたるもの常にスケールアップし続けていてもらわねば困るわけだが、彼らの場合、それが驚異的なくらいハイ・レベルなところで行なわれているわけで、15年以上ものキャリアを持ちながら、いまだに"ミュージシャンとして"の部分でも向上し続けているというのは、まさに恐ろしいことだといえる。

"KISS Classics"とでもいうべき代表曲の数々に加え、最新アルバム"CRAZY NIGHTS"からは「Crazy Crazy Nights」「No, No, No」「Reason To Live」そして「Bang Bang You」の4曲が披露され、いずれもコンサートのキー・ポイントなる箇所で演奏されており、そんなことからも、彼らがこのアルバムにいかに大きな自信を持っているかをうかがうことが出来た。特にブルースがキーボードを弾き、ポールがこれまでにも増して情感豊かに歌いあげる「Reason To Live」、ブルースのギター・ソロをフィーチュアした「No, No, No」は聴きモノだ。

そして、この時のインタビューでもジーンはこう言った。

「来年は日本に行けそうだよ」

ポールも同じことを言った。また、彼はこう付け加えた。

「キミ達がKISSを待っている以上に、僕達もみんなに会いたくてたまらないんだ」

"信じる"のと"期待する"のとは違う。半信半疑のままだったからこそ、10年ぶり3回目の来日決定には、本当に素直に驚いた。新聞で"来日"の文字を見つけた時、思わず"あっ"と大声をあげ、次の瞬間には、何をどうしていいものか、全く見当もつかなくなっていた。きっとそのままの精神状態で、僕は開演のベルを待つことになるのだろう。

でも、"夢の任務"が終わりを告げ、放心状態につき落とされた後、僕は一体どうなってしまうのだろうか。それを思うと今から不安でたまらないのだが……。

KISS JAPAN TOUR 1988

GENE SIMMONS: *BASS, VOCALS*
PAUL STANLEY: *GUITAR, VOCALS*
BRUCE KULICK: *GUITAR*
ERIC CARR: *DRUMS*

STEVE HABL: *PRODUCTION MANAGER*
MIKE RUSH: *GUITAR TECHNICIAN*
TONY BYRD: *GUITAR TECHNICIAN*
MARK HUGHES: *SOUND ENGINEER*
JEFF DURLING: *LIGHTING DIRECTOR*
MOE HAGGADONE: *DRUM TECHNICIAN*

PAUL MARSHALL: *ATTORNEY*
SHELDON PLATT: *ATTORNEY*
THEA KERMAN: *ATTORNEY*
BOBBY BROOKS: *BOOKING AGENT*

KISS® CHIKARA

力

日本編集CDベスト
10年振りの来日を迎えて発売した日本独自企画!
80年代の代表曲に90年代のKISS CLASSICSを加えたニューベストMCD!! 日本未発表の"サヴィング・ユー・ベイビー"のロングヴァージョン等、4曲の日本未発表ヴァージョンを含む!!

「CHIKARA/パワー」
CD●PSCR-20008 ¥3,000
5/25 on sale
予約受付中!!
初回特典 スペシャル レーベル+ワッペン

Including: ROCK AND ROLL ALL NITE/DETROIT ROCK CITY/LOVE GUN/I WAS MADE FOR LOVIN' YOU (Long Version)
CREATURES OF THE NIGHT (New Mix)/I LOVE IT LOUD (New Mix)/WAR MACHINE (New Mix)/LICK IT UP/ALL HELL'S BREAKIN' LOOSE
HEAVEN'S ON FIRE/THRILLS IN THE NIGHT/WHO WANTS TO BE LONELY/UH! ALL NIGHT/TEARS ARE FALLING

来日記念シングル「ターン・オン・ザ・ナイト」好評発売中 CD7R-2010 ¥700 ●8cmCDシングル PSCR-20001 ¥1,000

10年振り3度目の来日記念キャンペーン実施中!!
キャンペーン期間中(3/20～6/30)にKISSの 日本中のLP、CD、カセットを お買い上げの先着10,000名様に豪華カラーポスターをプレゼント

ASYLUM

CRAZY COLLECTION
LP¥1,950・2LP SET ¥3,200
CD¥3,300 2CD SET ¥5,800

CRAZY NIGHTS